

タイトル：平成 30（2018）年度 研究セミナー（第 19 回）

日時：2018 年 12 月 22 日（土）～23 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階マルチメディアセミナー室(306)

「*Lā Tahzan* における悲しみの乗り越え方—クルアーンの現代的解釈の展開」

兼定 愛（慶應義塾大学 SFC 研究所 上席所員）

私は、学外での発表経験に乏しく、知識の面でも未熟な部分が多いため、著名な先生方の前で発表することに対して、大きな不安を抱えていた。一方で、博論の完成に向けて前進するためには、専門家である先生方の客観的な意見を知って、自身の研究と正面から向き合う必要があるという思いもあった。そうして悩んだ末に、恥を忍んで受講を決心した。そして、セミナーを修了した今実感しているのは、この 2 日間は大変貴重な経験となり、今回受講して本当に良かったということである。もしも今、受講を迷っている方がいれば、精一杯準備するつもりさえあるなら、この機会を逃すべきではないと心から思う。

発表 60 分間、質疑応答 60 分間の 1 人当たり 2 時間という、他では見たことのない贅沢な時間配分については、ありがたいと思いつつも、不安も大きかった。しかし、十分な時間を確保していただいたおかげで、前半の 30 分間で博論全体の概要を話し、後半の 30 分間で現在取り組んでいる 1 章分について具体的に話すことができた。そのため、初めてお話しする先生方であったが、私の関心事や博論全体の主旨まで理解していただくことができた。また、それを踏まえた上で、他の章とのバランスを考えるとこの章に関する追加調査はどのくらい行うべきか、といった親身ご助言もいただけた。

最もありがたかったのは、すべての先生方が建設的なご助言を下さったことである。クルアーンの文脈を踏まえた専門的なご指摘からは、重要な点を見落としていたことに気付かされた。また、質問紙調査に関しては、断定的なご意見ではなく、複数の先生が各方面からご意見を下さり、多様な可能性に気付かされた。その他にも、整理しきれていない部分への的確なご指摘と共に、良い部分を見つけて励ましのお言葉もかけて下さる先生方の優しさは、大きな励みとなった。何より、至らない点ばかりの発表に対して、こんなにも真摯に向き合っただけに感謝した。そのおかげで、良い博論を早く完成させたいという熱い思いが私の中で一層高まった。

また、両日とも夜に懇親会を開いていただき、博論に関する議論の続きのみならず、先生方のフィールドワーク中のご経験に基づく面白いお話や、感動的なお話、学生時代のお話、さらには研究と家庭との両立のお話など、教室では伺いにくいたくさんのエピソードを教えていただいた。博論完成までの道のりは決して平易ではないが、そのようなお話には本当に心が癒され、また、素敵な研究者の方々ご存在から、走りきるための勇気をいただいたように思う。

最後になりましたが、先生方と事務局の方が、受講生への思いやりを持ってよく面倒を見て下さいましたことに、心より感謝いたします。少しでも良い博論を書くことで、恩返しできるよう頑張ります。ありがとうございました。